自己決定を促す支援のあり方について

—総合学習「えんそくにいこう」の実践から—

関　　和典

1

(1) はじめに

養護学級では，教育目標として「生活力のある子ども」を掲げ，子どもたちがそれぞれの実態に応じてのびのびと力一杯活動し，健康で楽しい学校生活を送る中で，様々な要求や力を実現していくことを願い日々の教育活動を計画している。そうするために指導者は子どもたちの要求を取り上げ，力一杯活動できるように，他の子どもやその周りの環境に対して適切な支援をしていく必要がある。

子どもたちが「生活力」をつけるためには，今年度のテーマである「自立に向かう」ことと密接な関係にあるといえる。子どもたちが大人や自分を取り巻く集団に対して常に依存していれば，到底自分の力で生活をしていくことは困難である。自らが自主的・自発的活動を好んで行っていくことができるような子どもの姿こそが「生活力のある子ども」といえるのではないだろうか。

本学級の子どもたちは，それぞれに日常的に好きなことがあり，そのことを楽しみにしながら期待感をもって日々生活している。その期待感は子どもたちの活動に対する意欲や見通しにつながっていくと思われるが，その中でも子どもたちの思いや行動が確実に授業の中でフィードバックできるように学習内容や学習環境を仕組んでいく必要がある。そうするためには，子どもたちの的確な実態把握をしてそれに応じた学習内容を用意することや，子どもたちのニーズに応えた選択の場があること，また，子どもたちがより良い方向として自己決定したものが達成感と共に実現できる場があること等が必要な条件としてあげられると考えられる。

ここでは，養護学級の「総合学習」を取り上げ，その学習を行う中で子どもたちがいかに自己決定をしていき，またそのときの指導者の支援はどういうものがあるのかということを，子どもたちが大好きな「えんそく」のことを単元とした学習の中で考えていきたい。

(2) 本学級における「総合学習」について

本学級において，総合学習は次のように捉えている。

> 従来，生活単元学習として，あるいは学校行事として取り扱っていた内容を検討し，それらのねらいも問い直し，活動を通して内容を指導する学習，つまり総合学習として位置づけた

また，ねらいは以下の通りである。

○　多様な集団の中で，様々な人間関係をもち，その中で自己表現，自己承認，仲間づくりをする。

○　生活の中での実践，生活への応用，定着を図ると共に生活経験を広げ豊かにする。

○　学校生活で不足しがちな自然への関わり，ものを作る，育てる楽しみを経験する。

このようなねらいを達成するために，季節行事や宿泊学習，東雲発表会の劇表現活動等の単元の中で，児童の豊かな表現や自主的・自発的活動を支援していくことを主眼に取り組みを行っている。また，本実践では，児童が自己決定する場や活動の設定について指導者がいかに児童と関わり，児童に自己決定を促すための豊かなイメージをもたせることができるかということを，児童の実態に応じた手だてをもとに考えていくことにした。

2　指導の実際

(1)　本単元について

学校行事の中で，子どもたちにとって楽しみな行事は多いが，その中でも遠足は特に期待感をもって心待ちにしている行事の一つであるといえる。本校では，春の遠足と秋の遠足との年に２回の遠足を計画しているが，春の遠足は新しい１年生を迎えての縦割り班での歓迎遠足であるので，学級としての学習が設定しにくいということがある。その点，秋の遠足は行き先や学習内容を各学年学級の計画の中で行えるので，総合学習のなかで計画していくことにした。

子どもたちの遠足に対する思い入れは様々で，公共の交通機関（バス・ＪＲ・電車）を利用することを楽しみにしている子どもや，行き先での施設・遊具等で遊ぶことを楽しみにしている子ども，また，家族の手作りのお弁当を楽しみにしている子どもなどがいる。子どもたちは，それぞれに日常的に行っている遊びや学習の中だけではなく，遠足という特別な日についてのイメージや見通しを子どもたちなりにもっている。

行事としての遠足を実施するにあたって，指導者側が行き先や活動内容をすでに決定した形で子どもたちに提示すると，子どもたちのそれぞれにある思い入れを多く引き出すことはなかなか難しい。したがって，子どもたちが「ここに行きたい。」と考えたり，「これで遊びたい。」と思ったり，「この乗り物に(交通機関等)に乗って行きたい。」と考えながら学習を進めていくことで，遠足についてのめあてをはっきりともつことにつながるだけでなく，遠足という学校行事の活動内容を自分たちの手で計画し実行するという自己決定力をもつけていくことになるといえるのではないか。そうしたことが，将来この子どもたちが自分の好きなことを見つけ，そのことに向かって行動を起こすことができたり，自分で計画して余暇を楽しむことができることにつながっていくと考える。

本単元「えんそくにいこう」は，従来の指導者主導の学校行事であった遠足に，子どもたちの思い入れや自主的な活動を加味していくことにより，子どもたちが自分たちで計画したという自己決定の実感をもってもらうことが少しでもできたらという願いをもちながら進めていった。

(2)　子どもたちのようすについて

本単元の児童の実態と課題は次のようである。

児	実　　態	課　　題
①	自分のやりたいことをこれまでの体験の中から表現することができる。ＴＶキャラクター等の絵が好きである。	新しい経験を重ねていくことで，自分のしたいことを，おおまかにイメージして表現できるようになる。
②	学校生活の中では自転車等の乗り物や，ブランコが好きである。自分のやりたいことを指さしやサインで表現できる。	学習の中で，自分の好きなことを選択したり，決定したりして，それを表現できるようになる。
③	集団での活動が好きで友達との関わりが多い。自分のやりたいことを主としてサインで表現できる。	新しい経験を重ねていき，選択肢を具体的にイメージして，その中から自分のしたいことを選ぶことができるようになる。
④	ＪＲやバス等の乗り物が大好きである。自分の好きな物を手がかりにして，やりたいことを言葉で表現することができる。	新しい経験を重ねていき，選択肢を具体的にイメージして，その中から自分のしたいことを選ぶことができるようになる。
⑤	お弁当を持って行くことが好きで，とても楽しみにしている。好きなことを言葉でたくさん表現することができる。	新しい経験を重ねていき，選択肢を具体的にイメージして，その中から自分のしたいことを選ぶことができるようになる。
⑥	身体接触や感触遊びが好きである。自分の好きなことをサインで表現することができる。	学習の中で，自分の好きなことを選択したり，決定したりして，それを表現できるようになる。

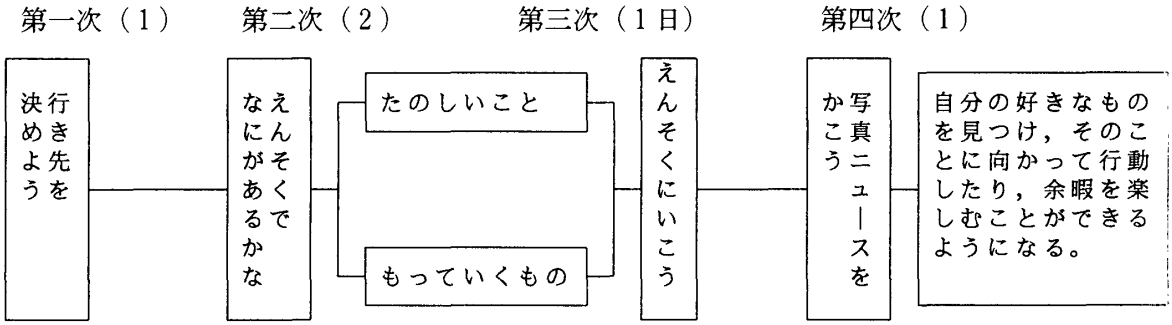
(3)　指導目標

指導目標については，以下のように自己決定に関する目標と，公共の施設の利用に関しての目標の２つをあげた。

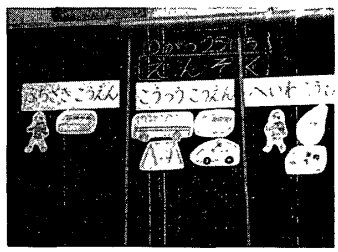
1　遠足に行く場所や，遊びを，自分たちで選択し決定することができるようにする。
2　公共の施設や交通機関の利用がスムーズにできるようにする。

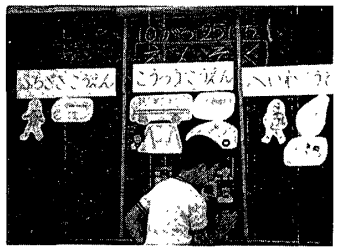
(4)　指導内容と計画

前述したように，本単元では自分たちでどんな遠足にしたいかというところから授業を行いたいと考えていたので，まずは第一次で活動内容も含めた行き先を決定する授業を組んでいき，その後第二次で決定した場所での活動をどのようにするかという授業を考えてみた。そうすることで実際に遠足に行ったときに自分たちが活動するめあてがはっきりすると考えた。さらに遠足に行った後写真ニュースを書くことによって，自分たちの活動を振り返り，学習をまとまった形でとどめておくことができるようにした。下表は指導内容と計画であるが，全単元で4時間と遠足当日の1日である。



(5)　「行き先を決めよう」について





児童が「遠足に行きたいなあ。」と思うのは，既習の事柄や，経験の中でとても楽しかったことがあり，そのことをもう一度やってみたいと考えたり，その場所にもう一度いってみたいと思うときであると考えられる。第一次では，児童が今まで行ったことのある場所や，児童が好んで行う遊びを多く含んでいる場所を提示して，その中から選択していく形を取った。本来なら児童の中から行きたい場所を出していき，その中から選択するのが妥当であると考えられるが，本単元では児童が具体的な遠足に対するイメージを持つことができるよう，行き先と，交通手段，その場所での遊びを提示した。

本時では児童の殆どが，お弁当を持っていくこと，バスに乗っていくこと，ゴーカートに乗れること，ブランコがあること等の理由で淵崎公園，平和公園，交通公園の中から，交通公園を選択した。このことは，児童がそれぞれ自分の好きなものや思い入れを自分自身で認識し，自分たちのしたいものあるいは行きたい場所を，これらを手がかりに自己決定することができたと考えられる。

(6)　「遠足で何があるかな」について

①　本時の目標

○　遠足で自分がどんなことをしたいのかを表すことができる。

②　授業仮説

児童に遠足の場での具体的な遊具等を提示すれば，児童は，遠足に対する期待感をもって自らがしたいことをワークシートに表すことができるであろう。

③　目標行動

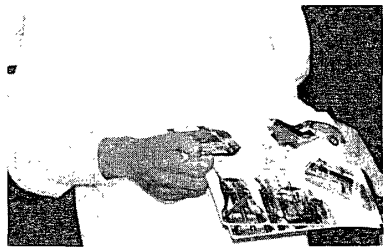
目　標　行　動	指導者の支援	児　童
自分のしたいことを提示された物の中から1つ選ぶことができる。	児童の好きなあそびを活動の中に組み込むようにする。	②⑥
遠足の場面での自分のしたいことを提示された物の中から1つ選ぶことができる。	選択の内容がよくわかるよう写真やＶＴＲを提示する。	③④⑤
ＶＴＲ等の疑似体験から活動をイメージして，好きな遊びを決定することができる。	既習の体験を想起することができるような選択肢を提示する。	①

④学習の展開

学　習　過　程	予想される活動	指導・支援活動 全体	指導・支援活動 個別
1 はじめのあいさつをする。		1 • 学習の始まりとして毎時間位置づける。	1 • 本日の当番児①が号令をかけるようことばかけをする。
2 明日は何があるのかを知る。 あそび　乗り物　行き先	• すぐに答えるであろう（児①③⑤） • すぐにはイメージできにくいと思われる（児②⑥）	2 • 今までの学習を想起させるようなことばかけをする	2 • 児①③⑤には賞賛のことばかけをする。児②⑥には，これまで使用した絵カード等を提示する。
3 遠足でのおたのしみを決める あそび　行き方　持ち物 ゴーカート　ブランコ　バス　べんとう	• ゴーカートではすぐに乗りたがるであろう（児①③⑤） • バスでは興味を示すであろう（児④） ブランコでは興味を示すだろう（児②） • 弁当では興味を示すだろう（児⑤⑥）	3 ◎児童が自分でやりたいことが決定できるよう具体的な疑似体験やＶＴＲ等を提示する。 • 児童が興味を示したり，やりたいことを表現したりしたことをその場で評価する。	3 • ゴーカートの疑似体験は全員順番で行う。 • 児④には，写真カードで示す。 • 児②には写真カードで示す。 • 児⑤⑥には具体物を示す。 4 • 児①③④⑤には，選んだ物を言語化して全体の場で知らせる • 児⑤には，選んだ物を認めつつ，自分で決めることができるよう再度具体物を提示する
4 ワークシートにやりたいことを貼る。	• すぐにやりたいことを選ぶだろう（児①③④⑤） • カードをたくさんとってしまうと思われる（児⑤） • すすんで発表したがるであろう。（児①③④⑤） • なかなか挙手しないと思われる（児②⑥）	4 ◎児童が興味を示した物カードにしてあらかじめ提示しておく。	
5 発表をする。		5 ◎児童が自ら決定したことを賞賛し，期待感が持てるようなことばかけをする。	5 • 児①③④⑤には挙手したことを賞賛する。 • 児②⑥には決定したことを尋ねるようなことばかけをする。
6 おわりのあいさつをする。		6 • 始まりと同様に毎時間位置づける。	6 • 号令は当番児①の役とする。

⑤本時でのこどものようす

本時では，ゴーカートのシュミレーションを作製し，それを児童に提示して模擬運転を行うことで，児童に「これに乗りたい。」という期待感や，具体的な操作を通してのイメージのもち易さをねらった。さらに右の写真のような写真シールを使用して，児童が遠足



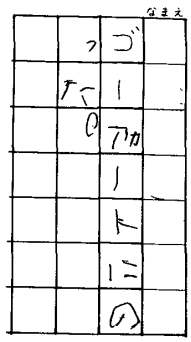
にいったら，あるいは，遠足で楽しみにしていることをワークシートに貼っていくことで，児童が見通しや期待感をもってほしいと考えた。左の写真は，児⑤がシュミレーションを行っているところである。本児は，遠足というとまず「お弁当もっていきます。」というほど，弁当に対して強いイメージをもっている児童である。本児に具体的な活動をシュミレーションという形で提示したことで，「次の日は遠足に行ってお弁当も食べるけど，ゴーカートにも乗るんだ。」という見通しをもってもらうことができたのではないかと考える。また，児②は，ブランコが大変好きなので，ＶＴＲで交通公園のブランコを映し出し，それと同じ写真シールを選択肢の中に入れてみた。するとブランコのシールを一番に貼っていた。

児④は，バスがとても好きであるが，ゴーカートのシュミレーションをした後は，すぐにゴーカートの写真シールを貼っていた。児①③は，ゴーカートに乗った経験があるので，シュミレーションの運転もスムーズで，すぐにゴーカートの写真シールを貼ることができた。児⑥は，本授業の時は欠席であったので，様子を述べることはできないことを加えておく。

(7) 遠足当日や写真ニュースでのこどものようす

横川駅から交通公園までは，かなりの距離があり，その道のりは徒歩で行くことになっていた。遠足当日，交通公園に行く途中，２カ所公園があり，滑り台もブランコもあって，「ここで遊ぼう。」と指導者が誘ってみた。そのときほとんどの児童は，「ちがうよ。」「ゴーカートがない。」といっていた。このことから，児童は，今回の遠足は交通公園に行って，ゴーカートや，その他の遊具で遊ぶのだという見通しや，期待感，交通公園に対するイメージはもっていたと考えられる。

写真ニュースについては，事前学習から児童に遠足ノートを持たせ，ワークシートや写真ニュースもそのノートの中に入れた。ワークシートで自分の乗りたいものを決め，実際に遠足に行ったときの様子を収めた写真を見ながらことばや文字で表現することをねらった。児③は，遠足に行った当日の夜，さっそく写真ニュースの本来写真が来る場所にゴーカートの絵を描いて自分で文章を書いてきた。このことから，児③は，遠足の事前学習から当日の活動，そのふりかえりをいろいろなものを手がかりに自主的に活動したと言える。



3 考　　察

(1) 遠足に対する期待感を持つことができたか。

本単元では，自己決定をする以前に児童がまず遠足に対するイメージをどれだけ多くもっているのかということを考えていくことにした。自己決定を促すためには，決定を左右する理由や原因が必要となってくる。そういった意味ではゴーカートの模型，ＶＴＲ，弁当，写真カード等の提示によって遠足がどんなものであるかというイメージはもてたと考えられる。

(2) 自己決定する場や活動の設定が適切であったか。

事前学習の段階（第一次）では，児童が手がかりを探して自らが自己決定したものであると判断できる。第二次では遠足のイメージ作りに終始して，自己決定というには不十分な点が多くあったと思われる。それは以下のように考えることができる。

① 児童がいろいろな具体物や，カード等の提示によってイメージされたものを，ワークシートに表すことそのものは，児童の自己決定とは言えないのではないか。

② 児童が好きなものを提示していくことで，やりたいことが決まるという決定のメカニズムは狭い範囲で行われているとは言えないだろうか。児童が，好きであるものや，嫌いであるものを丸ごと提示しながら行われていく方が自然であると考えられる。

③ 本来の自己決定は，児童が遠足に行ったとき，事前の学習を手がかりとして初めて行われるものではないか。

以上のように，本単元での実践は，児童が学習の場で自己決定をする以前に，決定する大本となるイメージ作りや，新しい経験の蓄積には効果があったと考えられるが，授業の中で，自己決定そのものを促す取り組みとしては，まだまだ多くの課題が出てきたと言えよう。さらに，本学級の児童が，「～したい。」と思って自己決定し行動に移すことだけでなく，「～したくない。」と考えてそれを全体の場で表現することもプラス思考で考えていくことが必要なのではないか。言い換えれば自分の意見を持って，そのことを表現する本人参加という視点が重要になってくると考える。

(3) 児童に自己決定を促す適切な支援ができていたか

本単元では，児童の好きなものや，思い入れの強いものを児童の実態にあわせて提示してきた。従って児童の活動の欲求は引き出せたと考えられるが児童が自己決定をしているかどうかの吟味をすることができるようなはっきりとした提示の仕方が曖昧であったと考えられる。例えば，ブランコの好きな児②に小学校のブランコと交通公園のブランコを提示して，どちらにのりたいかを尋ねれば，自己決定したかどうかの判断基準になったと思われる。ワークシートによる活動も，自分の手で貼っているが，選択肢はかなり限定されていた。こういったことが今後の課題になると考える。

4 おわりに

自己決定を促す取り組みとして，「えんそくにいこう」という単元での実践を述べてきた。養護学級では，自立に向かう子どもの視点として，学習の汎化を図る場や活動，社会や多様な集団での関わりの場の設定について，今後も考えていこうとしている。本単元が自己決定に視点をあてた取り組みよりも他の視点での取り組みの方がより有効であることがある可能性もある。今後は，他の視点からのアプローチも必要になってくるであろう。